

研

乃

書

| |
|-----|
| 027 |
| 71 |
| 2 |

029
71
2

あはれを
上はれいり、あはれを名利
の罪、上はれを、二又
之を、編みを、二又
居る方へ、編み

更衣日

北坊主

高の

うふあまを



夢知女の書

一 年も 足敷 中々 あー 印 扇
 えり や 井 沼 か 太 田 も ち かり と
 大 子 や や 葉 と 子 よ せ と 之 録 悔
 五十 川 杖 の ぬ け
 類 林 を ば ん 筆 の ち 光 世
 七 茶 や 是 と ち と 柳 子 可

空の川に流るる水の神や梅の花
何れも能く其の心は我の物に非
ずとも目に出るは外に初者う其
上那うも其の苦に花辭の草
空の海に流るる水の神や梅の花
葉の蔭にありて食ひて木の芽哉

茶人新巻

小庭より外代は是亦た松の葉

去る魚や捨る藤扇と去るは

春の巻

去る藤や心も去りて其の心
出代や木履き付行く夕百景
去るも其の心は外に初者う其
西行も其の心は外に初者う其
去るも其の心は外に初者う其
三日月も小判の心は外に初者う其

元山も侍んて草小 ちんう水
空の鳥を囓れ皮有り 猫の意
婦人との祈沼か有り 樹 哉

八十燈

聲の葉は葉一や松よお代へけて
鳥籠を鳥く囀く此翅く索
天人の笛落し一ノ乳空雀 哉
喰けし 富の多話有り 燕のぬ

奥州行脚

大木戸の伊達を 雛子の羽必哉
湯もとも知くくくくく ぬ田螺うき
落し時 庭のぬけくぬ 撲くぬ
是れもあき花や大根の引割く
笛代や月の壳の 是きと之を
あしくくく世に なる能 田子哉
畑子や力もいぬぬ 槌の音

目に見つぬ風を伝ふや凡中
雛形月や上戸のわらわ小登
喰ひて腐る牛乃行美や草の候
夏風よま草きさうたけゆ干うぬ
ち〜すりを評述も表を替へぬ
市に女月智の音はあり一柳のふ
花見ても泣くより多〜頃午の浦
山を〜下は草の如さう〜か

凡我人を蹴り踏り履のふ

三州の橋や

紫のさつちの〜草茎の柳
落葉の〜の〜水に柳を草橋か
今咲ぬ柳も〜を〜春の庭
春風を詩〜柳に落葉〜如

双林寺の柳

見へる屋も枝の腐や春の

布袋讚

顔のこゝろはあゝ少能 笑ひうゑ
 湖のあもりきやぬむと
 行喜や札もまゝ久しかり
 二代もくはうゑの帯や更な
 灌佛や海老のせきつゝぬや
 人々のまゝん 禊や 妻の好
 卯花やうゝ札をまゝるゝ

不夫も侍衆をぬゝ 横の突

加茂祭

かうゝが葵かつゝや元あゝ信

五津嶋芝納

学々死 又しあゝうゝ 若葉うね

雲の白

嘩ーりゝゝ死まゝ唇々ー 茨子のむ
 柳子よりも名家の猫子 牡丹か

竹の子や肉の子を人あはれも
囃子も 鳥の道はや 子規
桑子花を 匂に子ありかん二智
る世より 親のやうまゝ 行く子
角あはれ 親のあしき 康の子が
松尾の下まを 行く 囃子の
三尺の 菅戸も 五尺の 蓆戸も
歩刀や あや先と 歩数 踏の拍

新康を越へて

響草、鬼のまゝや百人合の
衣張も 柳の 月影や 杜鳥
鴨焼も まゝ 玉ふへ 初花子
片草も 上子よゝゝ 小田梅が
里花子の 花も 花や 花うな
口きく 人を 花の 花の 花の 花
満月も 花の 花の 花の 花

空をよみ新しき霞月や氷宮守
霧の身に花 露のあまき 曇りてか
霧のあまき 川も湯もあまき 舞の
夕まじりや かくむく 暮の戸に 起る
迎へて 見れば 心をあまき 戸を
霧の言ひまじり 戸を不二の心
抱くや 霧の言ひまじり 心の形
泥まじりまじり かくむく 蓮の花

踏む月花あまき 抱抱や 抱半
山里や 白をたりんく 暎の霧
見定ぬまじり 霧おりりや 雲の峰
日まじりまじり 抱抱まじり 霧の
一念の蛇 霧とあまき 赤婦人
築刈花 火をう川 音や 木下 音
色まじり 木の末まじり 音や 桜樹の
霧のあまき 抱の胸も 音花まじり

此の地獄書きありは 破れ袖
裏の月や川よりいふ所の面
振袖をうらめて踏み傳はす
毛襖のまはりておのり苔孔花
屋白やすつと花の妙きもん
又新や鼻孔言ひも傳氏うら
振袖の風をたぐり行く扇の如
きよきと 此見屋敷うらむか

大名も囃しをすけ敷木を
扇の孔 いやう秋を傳うれ
秋多好く 肌よおほくや
星達や二夜もあつと笑ひもの

嘉永

夕敷のまも 寄女殿 暮うた
迷ふと月おほき新竹簾
物よ好く見たりこれ 妙扇

釣つ所やわ月映りて 夜の花
 影をくさす 鞭を折る 木槿を
 影をくさす 秋の曇る 傘
 柳を折る 水に 影をくさす
 今 釣つ所 雨の音 一葉の
 義経のちの 木の葉の音 初嵐
 所 知る 木戸の 水や 秋の風
 ハ 影も 目のあて 影をくさす

稲妻や 花や 柳の影
 握袖は 折灯志の 影 大哉
 三十も 老の 影 入る 影
 何と かも 影 影 影
 ハ 影 や 柳の 影 の 影
 沢山は 影 の 影 影
 ハ 影 の 影 影 影

傾城の画日

吹ぬりそふくと筆を写すに柳
秋のおや亦裏を梓の竹おひ

三文像

雪の影もうまを小に新の雪
小き花い浦は阿古おや略のな
老ぬ此い隣も老きり 砧 うしろ
席の音やよん 藝よりい 山の真

朽尾明神像

新屋や 掃き鏡の神にる
谷川 残るふきを 帯の縁うね
秋の田舎うね 林のある 菩薩哉
盗人よりを 負きうね 熟掃の
草物やよふく こそうね 板珠はる

宇治あし

くく栞や扇は 芝の 栞きき

あきしつや朝毎のきくぬ露の爪
 行し秋や喧何とさし日の弱り
 雲うらまを人をも慰むしう此哉
 ありありあき多き哉 雪の海を
 遠く島や山のほそむ目も似て
 樂まき春暄よりうて十折のぬ
 お命請や宗旨おん此願と海
 とく月多やふも煙しよき帰し

持ゆきとほくぬ此ききし美を
 さまし度や賑よ小をを 唱ちきり
 茶の花やうほまけし 道のきく
 庵のきん日をすましと此の屋敷にぬ
 紫垣よ 采を 見 眺めやきき
 花ひとを 踏みけし 菊も 枯れし 花
 采の 妙ありしを 扱 可なり
 弓 張 此 腰より けり 哉

埋大や世々——是も凡のおと
 長明々んのこ——や蜀史施
 中争ありよ——ておく枝や中々
 燈斗きや常此業とつしきは
 小中々々——うま家尻の飄う那
 各々々や梢此ききの影あくも
 漆撞此々んはあひあき至
 顔々世や鼻をかむも上は下は

き返り見るとあういさ返り見
 足新あう——こも唇々々のあ
 うら破々——破々——氷う那
 柳新此々うあう——空さう京
 何々——刃のさハうきあ子さ
 葉斗——も誦々此花水ゆ花
 空々葉や盗人はあうう房の雨ま
 静々々の履々きあう——生何風か

一程きくまのぬくはくまのぬく
か〜風〜肘のま〜の鷹運〜
炭竈や 栂のあつた 猿乃尻

蟬丸懐

改巾あ〜う家もあ〜りや百人一首
三日月もあ〜ハ 鋏取 光く東
瞬ハや 風をあ〜ふ 山 瓦
志〜句〜ハ け世の 園や 渾一 扣

伊達〜 持者〜 空急佛
寒〜や〜や 山〜り 吹〜 峯の 栂
常衣の や 筆也 絶う〜り せ〜出立
河 孫汁の 前〜 痔瘻の 咄〜 風
あ〜ち〜々 毒〜や〜 葉官
庭〜あ〜わ〜せ〜り〜あり〜く〜し〜や〜あ〜の 栂
栂 栂〜も 又〜あ〜目〜ま〜り 札 柳 免
御佛の 坊中〜る〜りや 栂〜〜い

うあ〜る。花のゆめや
買ふ出〜物。〜年つ市
餅多や。籠も多。終り。ち
近隣の美筆もあ〜きう〜新
年内多妻
妻より〜了。か〜喜や。この肉



明起壬辰年

五月日

京五条寺町 橋屋治兵衛

安濃津立町 山形屋傳右衛門

